

**令和七年度西条市交通安全市民大会**

# **交通安全子供作文優秀作品**

**西条市交通安全推進協議会**

## 目次

|         |    |        |                   |    |
|---------|----|--------|-------------------|----|
| ○西条小学校  | 五年 | 近藤 桃子  | 自転車の危険について        | 3  |
| ○神拝小学校  | 五年 | 林 杏樹   | 毎日気をつけたい交通安全      | 5  |
| ○徳田小学校  | 五年 | 佐伯 奈々美 | かけがえのない命を守るために    | 7  |
| ○周布小学校  | 五年 | 山田 華楓  | 命を守る一秒の確認         | 10 |
| ○大町小学校  | 六年 | 伊藤 愛華  | 命を守るためにできること      | 12 |
| ○西条東中学校 | 一年 | 今村 心音  | 後部座席でもシートベルトを     | 14 |
| ○東予東中学校 | 一年 | 稗田 佑翔  | 予測できない危険から身を守るために | 16 |
| ○丹原東中学校 | 一年 | 林 想乃   | 私にとっての一番は         | 19 |
| ○小松中学校  | 一年 | 桑原 彩乃  | 信号無視は絶対ダメ！        | 21 |
| ○西条北中学校 | 二年 | 小池 真生  | 笑顔を守るために          | 23 |

## 自転車の危険について

西条小学校 五年 近藤 桃子

私は高学年になり、習い事や友だちと遊ぶ時、よく自転車に乗るようになりました。自転車は、歩くときよりも速く行きたいところに行けるので便利ですが、危ないこともあります。

自転車に乗っていると、道に出る時に左右が見えないところがあつて、曲がる先に車や人がいるかなどわからないことがあるので、注意しないといけないと思いました。逆に私が歩行者の立場で、角から急に曲がつてきた自転車とぶつかりそうになったこともありました。だから、角や曲がるときは、一度止まったりスピードを落として曲がつたりすることが大切だと思います。

また、自転車に乗っていたらちよつとした段差で自転車が倒れてしまつたり、ハンドル操作を誤つて電柱にぶつかりそうになったりしたことがあります。自転車に乗ることになれてきても、いつけがをするかわからないから、ヘルメットを被ることはと

ても大切だと思います。

最近、スマートフォンを見ながら自転車を運転する人をたまに見かけます。私はスマートフォンを見ながら運転したら前が見えなくてこけたり、人とぶつかったりして危ないと思います。スマートフォンは、必ず自転車に乗るときは見ないようにしてほしいです。

また、イヤホンをつけて自転車を運転している人も見かけます。私は家でイヤホンをつけて音楽を聴いたことがあります。聴いている間は、家族に声をかけられても聴こえなかったのも、こまつたことがあります。だからイヤホンをしたまま自転車を運転していると、音楽を聴けて楽しいですが、周りの音が聞こえずに、車が来ているのもわからないと思うので危険だと思います。

テレビで、自転車が車とぶつかつて、自転車の人がけがをしたり、なくなつたりするニュースも観ます。また、自転車と歩行者の事故で、歩行者がけがをするニュースも観ます。

自転車は便利ですが、事故のひ害者や加害者どち

らにもなるということがわかりました。一瞬の事故で、大切な人がけがをしたり、なくなったりするのはとても悲しいことだと思えます。出かけるときにお母さんやお父さんが毎回、

「気を付けてね。」

と真けんな顔で必ず言ってきますが、本当に何があるかわからないので、気をつけないといけないと思いました。

これからも、たくさん自転車に乗ると思いますが、スピードに気をつけて安全運転をしたいと思っています。車や人の動きをよく見て、相手がどんな動きをするのか予測しながら自転車に乗りたいです。

## 毎日気をつけたい交通安全

神拝小学校 五年 林 杏樹

わたしは、交通安全について考えました。そうすると、毎日の登校や近くの公園に行く時のことを思い出します。家の近くに信号機のない横断歩道があって、そこを渡る時は、ドキドキすることがあります。車が止まってくれるか、ちゃんと見てくれているか心配になって、怖い時もあります。

前に、友達と公園で遊ぶ約束をしていて、わたしは少しおくれてしまいました。「早くいかなきゃおくれちゃう。」と思って、信号のない横断歩道を急いで渡ろうとした時、車が近くまで来ていて、すぐびつくりしました。わたしは、あわてて止まりました。止まらずに走っていたら、ぶつかってしまっただかもしれません。家族も友達もみんながきつと悲しい気持ちになると思います。今でもわたしは、「急いでいても落ち着いて行動しないとだめだ。」と思っています。それから、急いでいても横断歩

道では、必ず左右をちゃんと見て渡っています。

学校に行く時は、毎朝お父さんやお母さんが旗当番をしてくれています。黄色い旗を持って、わたしたちが安全に横断歩道を渡れるように見守ってくれていて、本当にありがとうって思っています。わたしが少しおくれて登校してしまった時も、旗当番の人が、

「急がなくていいよ。安全に渡ろうね。」

と、声をかけてくれました。そう言われて、わたしは、早く行くことより安全に行くことが大事と思えました。周りの大人は、わたしたちの安全を守るために毎日がんばってくれています。なので、わたしは、「おはようございます。」「ありがとうございます。」と元気にあいさつをするようにして、みんなが明るい心で登校できるように、思いやりの心や言葉を大切にしようと思います。わたしが、登校班長さんになったら、旗当番の人だけでなく、班のみんなにも元気よく、あいさつをしようと思いました。交通安全について考えていると、みんなが気をつけることが大事だと思いました。信号がある所でも

青になったからといって、すぐに進まずに、よく見て車が止まっていることを確認することが大事だと思いました。特に信号がない横断歩道では、ものすごく注意が必要だと思いました。車の運転手さんも気づかない時があるので、わたしたちがちゃんと見てタイミングを考えて渡ることが大切だと思います。そして、わたしたちの安全を守ってくれている人たちへの感謝も忘れずにいきたいと思います。

わたしは、交通ルールを守って、安全に行動するようにしたいです。これからも、交通安全を意識して、毎日を元気に過ごしていきたいなと思いました。そして、友達とも交通安全の大切さを話したり、みんなで事故のないように安全に過ごしたりしていきましょうと思いました。いつも忘れず、危険がないような生活をしていきたいです。

かけがえのない命を守るために

徳田小学校 五年 佐伯 奈々美

交通事故のニュースを見て、母と姉が話をしていました。私も最近、交通事故にあっている人が多いと感じていました。母の、

「この事故は、ヘルメットをしていたから助かったよね。」

という一言をきっかけに、家族で交通安全について話し合いをしました。

まず、家族が体験した交通事故の話を聞きました。

一つ目は、一番上の姉が中学生のときのことです。

姉は、登校中に、通学路の標識がある道で車と接触する事故にあったそうです。幸い、ヘルメットをかぶっていたので、軽傷ですんだとのことでした。私は姉の話を聞いて、

「姉が無事でよかった。」

と思いました。そして、ヘルメットはとても大切だと感じました。事故にあったとき、姉がヘルメットをかぶっていなかったらと考えると、もっと大変な

事故になっていたのではないかと考えました。私は、通学路でも気を付けないといけないと思いました。

二つ目は、もう一人の姉が中学生のときのことです。姉は、登校中に車を避けて二メートル下の川に落ちてしまったそうです。この時も、ヘルメットをしつかりとかぶっていたので、すり傷ですんだとのことでした。このときも、事故が起こった場所は通学路だったそうです。私たちが通学する時間帯は、通勤する車もたくさん通る時間帯です。私は、ヘルメットをきちんとかぶることの大切さを改めて強く感じました。

家族との話合いを通して、事故は身近なところにもたくさんあることが分かりました。私は、姉たちの体験から、自転車に乗るときにきちんとヘルメットをかぶることはもちろんですが、普段の登下校でも周りをきちんと確認して、安全に通学しようと思いました。

自転車に乗るときに、ヘルメットをかぶっているときとそうでないときでは、事故があったときに大

きなけがを負ってしまったり、命を落としてしまったりする危険性に、大きな違いがあります。

インターネットで調べてみると、警視庁の資料では、二〇二〇年から二〇二四年の間に自転車乗車中の交通事故で亡くなった人のうち、五十パーセントは頭のけがが原因だったそうです。

頭のけがが原因で亡くなったり、重傷を負ったりした人のうち、ヘルメットをかぶっていない人の割合は、かぶっている人の割合の約二倍近くになるそうです。また、二〇二四年の愛媛県のヘルメット着用率は約七十パーセントで、他の都道府県と比べると、着用率は高くなっています。

しかし、私は、ヘルメットをかぶっていない人がいるのはどうしてか気になりました。

そこで、なぜヘルメットをきちんとかぶらない人がいるのか調べてみました。すると、ヘルメットをきちんとかぶらない人が多い理由として、二つのことが分かりました。

一つ目は、自転車乗車中にヘルメットをかぶることとは努力義務で、罰則などは設けられていないこと

です。罰則がないからという理由で、ヘルメットをかぶらない人が多いそうです。わたしは、法律で罰則が設けられていなくても、ヘルメットをかぶることとは、自分の命を守るためにはとても大切なことだと思います。

二つ目は、脱いだヘルメットを運ぶことやヘルメットをかぶることが面倒だということです。確かに、運ぶことやかぶることが面倒で、かぶりたくないと思う人もいると思います。しかし、わたしは、かけがえない命は何ものにも代えられないので、必ずヘルメットをかぶってほしいと思います。

このように、家族と話し合ったり、自転車乗車中の事故について調べたりすることを通して、事故につながる危険なことは、身近なところにも潜んでいることが分かりました。

私は、きちんとヘルメットをかぶって安全性を高めたり、周りをきちんと見て危険な場所がないかを確かめたりしたいと思っています。そして、家族と話し合ったことや調べて分かったことをこれからの生活に生かして、かけがえない命を守っていききたいで

す。

## 命を守る一秒の確認

周布小学校 五年 山田 華楓

わたしの家は、学校から歩いて2分ほどの所にあります。道はまっすぐで、信号も交差点もありません。毎日同じ道を通っているの、つい気がゆるんでしまうこともあります。

ある日、いつものように歩いて下校していると、家の近くで車のエンジン音が聞こえました。わたしはそのまま前を見て歩いていましたが、いきなり横から車が出てきて、びっくりして立ち止まりました。車は家の向かい側の駐車場から急にバックして出てきたのです。わたしがもう少し前に出ていたら、車の後ろとぶつかっていたかもしれません。

「危なかった…」

心臓がドキドキしてしばらく動けませんでした。運転手さんもすぐに気づいて止まってくれて当たらなかったですが、その時の怖さは今でも忘れられません。

それまでのわたしは、「うちの近くだし、安全だ」

と思いこんでいました。信号も交差点もないし、何も考えずに歩いていました。でも、この出来事があったから、「どんな道でも油断しちゃいけないんだ」と強く感じました。

わたしがその日学んだのは、「安全そうに見える場所ほど、注意が必要だ」ということです。

それから、家の前にある車の出入り口では必ず止まって、左右を確認するようにしています。

そして、わたしがもう一つ気をつけていることがあります。それは、自転車にのるときのことです。

わたしは週末や放課後に友だちと遊びに行くときは、自転車にのって公園やお家に行きます。そのときも、交通安全を意識するようになりました。

この前公園に行く途中で、急いでカーブを曲がったとき、向こうから来た自転車とぶつかりそうになったことがあります。どちらもスピードが出ていて、あわててハンドルをきったので、転びそうになりながらもなんとか止まりました。

そのときも、「もう少しゆっくり自転車をこいでいれば…」と思いました。

自転車はとても便利だけど、思っている以上に危ない乗り物だと思います。スピードが出る分、止まるのにも時間がかかるし、ちょっとした段差やよそ見で、バランスをくずしてしまうこともあります。

だからわたしは、自転車にのるときも「命を守る一秒の確認」を大切にするようにしています。交差点では必ず止まる、左右を見てから進む、歩行者を見かけたらスピードをゆるめる。どれも当たり前のことだけど、意識してやるのとやらないのでは、大きくちがいます。

わたしの父は、5歳と7歳のときに交通事故にありました。7歳のときの事故では頭を強くうって入院しました。後遺症で左耳が聞こえにくくなったそうです。

事故は一瞬のことです。その一瞬が、ずっと忘れられない記憶になったり、命にかかわることになったりします。だからこそ、わたしたち子どもも運転手さんたちも、おたがいに思いやりをもって行動することが大事だと思います。

わたしは、毎日の通学も遊びに行くときの自転車

も、「安全に過ごせる時間」にしたいです。そのために、自分ができることは何かを考えて、行動していきたいです。

「事故にあってから気をつける」のではなく、「事故にあわないように気をつける」ことが、本当の交通安全だとわたしは思います。

これから「あと一歩出る前に止まって見る」「あと一秒だけ周囲を確認する」、その小さな行動を、毎日忘れずに続けていきたいです。そしてその思いがわたしの友だちや家族にも広がっていったらいいかなと思います。

命を守るためにできること

大町小学校 六年 伊藤 愛華

「たった数分のちがいで、命を失うかもしれない」。これは、小学校の先生が語った言葉だ。初めは大げさに言っているように聞こえたが、最近、自転車でもヒヤッとする体験をしたことで、その言葉の重みを実感するようになった。

ある日、友達との約束に間に合わなくなりそうになってしまい、急ぎ足で自転車をこいでいた。信号が赤色になりかけた交差点で、止まるか進むか一しゅん迷った。結局、止まる判断をしたのだが、その数秒後、すごいスピードで車が通過していった。

「もし、そのまま進んでいたら…」。

そう考えるだけで、こわくなる。交通ルールの大切さを体感したしゅん間だった。

交通事故は、だれにも起こりうる身近なきけんだ。令和の時代になっても、年間でたくさんの人が命を落としているという現実がある。その多くは、「ほんの少しの油断」や、「急ぎたい気持ち」が引き金

となっている。だからこそ、ルールを守るだけでなく、相手の動きに注意を向ける「思いやりの運転」や、「きけんを予測する力」が必要だと思う。

学校でも「交通安全教室」があり、交通安全についての話やシミュレーション体験などがあるが、正直なところ、その日が過ぎると記おくや意識はうすれてしまう。だから、本当に大切なのは、日常の中でどれだけ意識を持ち続けられるかだと思う。通学路での歩行者、信号無視をする自転車、スマホを見ながら運転するドライバー…それぞれが一つのリスクになり得る。

最近では、自転車の技術の進化や車の安全機能も向上している。しかし、技術にたよるだけでなく、人間の「判断」と「思いやり」があつてこそ真の安全は守られると思う。たとえ数分おくれたとしても、安全に行動することで、自分と相手の命を守ることができると思う。

交通安全は、特別なことではなく、「いつもの行動」に宿るもの。今日も、横断歩道の前で止まり、相手の目を見て、「大丈夫」と「ありがとう」の気

持ちを交わせた。それだけで、社会は少しやさしくなったような気がした。

これからも「小さい行動」や「判断」、「思いやり」を大切にして、自分や相手の命を守る行動をたくさん積み重ねていきたい。そして、自分や相手の命を大切にしていきたい。

## 後部座席でもシートベルトを

西条東中学校 一年 今村 心音

私の家では、車に乗るときにどの席に座ってもシートベルトを必ずするようにしている。しかし、いとこや友達の車に乗せてもらったときにしようげきを受けた。いとも友達も後部座席に座ったら必ずと言っていいほど皆シートベルトをしていなかったのだ。私は、小さいころから親に車に乗るときには必ずシートベルトをするように教わっていた。だから皆にシートベルトをするように注意しようと思った。しかしシートベルトをするようにとだけ言っても、皆はめんどくさいやどうせ大丈夫ということとを理由にしてシートベルトをしないだろう。と勝手にしまい、注意することができなかった。そこで私は、皆にしつかり注意できるようにシートベルトをしていなかったらどんな危険性があるのか調べることにした。すると警察庁のホームページに次の三つのようなことが記載されていた。

一つ目は、車内で全身を強打する可能性が高い

ことだ。事故のしようげきで、体がとばされ前席や天井、ドアなどにたたきつけられてしまう。仮に時速六十キロメートルで進んでいる車がかべなどに激突した場合、高さ十四メートルのビルから落ちるのと同じしようげきを受けることになる。

二つ目は、車外に放り出される可能性が高いということだ。ぶつかった勢いが激しい場合、後部座席に座っていても車外に放り出されてしまう事がある。車外に放り出されると、アスファルトに体をぶついたり後から来る車にひかれてしまったりすることでも最悪の場合、命を落とすこともある。

三つ目は、前席の人が被害を受ける可能性があることだ。ぶつかった勢いで後部座席に座っている人が前方に投げ飛ばされると前席に座っている人は、シートとエアバックにはさまれて頭に大けがをすることなどにより、命をうばわれることにもなりかねないのだ。シートベルトの非着用による交通事故の死亡率は、高速道路で着用時の約十九・八倍、一般道路で着用時の約三・二倍も高くなる。

このことからシートベルトを日ごろからすること

によつて、事故にあつた時に守ることのできる命があるということがわかる。普段シートベルトをしていない人からすると、めんどろくさかったり、はずかしかったりするかもしれない。しかし、シートベルトをすることは、自分や皆の命を守ることにもつながる。だから私は、シートベルトをしていない人にこのことをしっかりと伝えていくと心に決めた。

予測できない危険から身を守るために

東予東中学校 一年 稗田 佑翔

皆さんは、乗り物でヒヤッとした経験はありませんか。僕は先日、生まれて初めて命の危険を感じました。それまでは、交通安全の大切さは分かっていた。でも、どこか他人事のように思っていたのです。しかし、この出来事を通して、それがとても身近な問題であることだと考えるようになりました。

僕たちの中学校では、ほとんどの生徒が自転車通学をしています。僕も入学と同時に自転車での通学を始めました。自転車は速くて便利な乗り物です。重たいカバンを後ろに積んでも文句ひとつ言わず、僕がペダルを強くこげば、それに応えて一緒に走ってくれる、まるで相棒のような存在です。

入学から二か月ほどして、学校で交通安全教室が開かれました。実際の事故の事例を聞いたり、自転車の実技講習を行ったりして、安全に登下校するための注意点を学びました。僕も、「ルールを守り、正しく運転することが大切だ」と強く感じました。

しかし、日常に慣れてくると、その「当たり前」が崩れる瞬間がやってくる場合があります。毎日通学するうちに、運転に自信が付き、僕は次第に友達とおしゃべりをしたり、スピードを出したりするようになっていました。そんな油断をしていたある日、ヒヤッとする出来事が起きたのです。

それは、部活動の帰り、夕方のことでした。空が暗くなりはじめ、僕は疲れた体で自転車をこいでいました。ヘルメットの頃から垂れてくる汗をタオルで拭き、「晩ごはんは何やろう」などとぼんやり考えていたとき、見通しの悪い三差路にさしかかりました。いつもなら、僕は、カーブミラーを確認してから通るのですが、そのときは注意をおこたってしまいました。

突然、脇道からグレーの車が飛び出してきました。僕はあわててブレーキを握りしめ、ハンドルと一緒に心臓を握りつぶすような感じがしました。幸い、相手の車も急ブレーキをかけ、ぎりぎりであつからずに済みました。運転していたのは六十代くらいの男性で、まん丸な目で僕を見つめ、ガラスの向こう

で「だいじょうぶ？」と口が動いているのが見えませんでした。僕も小さくうなずき、互いに頭を下げて交差点を離れました。気付くと、汗を拭いていたタオルごとブレーキを握っていて、身の危険を感じて必死の行動を取ったことを実感すると同時に、冷や汗が止まりませんでした。

帰宅後、家族にこのことを話すと、もちろん大いに叱られました。そして、何がいけなかったのかという家族会議となりました。この話合いで、僕は、どれだけ疲れていても、急いでいても、安全に対する意識を保つことが必要だと実感しました。今回は、自転車の運転に慣れてきていたことが、油断につながったと思います。家に着くまでが通学です。油断しないで、安全運転を心がけるべきでした。

そのあと、令和六年中の交通事故の件数を調べてみました。警視庁の発表によれば、全国で約三十万件もの事故が発生しています。とても多いと感じました。原因の多くは「人的要因」、つまり、今回の体験のような、判断ミスや注意不足によるもので、全体の八割以上にも上ります。事故にはならなかつ

たけれど、僕のように危ない経験をした人の数は、その何十倍にもなるのではないのでしょうか。

ここから、もう一つ大切なことが見えてきました。それは、自分も含めて「人間の行動を信用しすぎてはいけない」ということです。車は来ていないだろう、相手が止まってくれるだろう、ミラーを確認したつもり……。そんな、小さい思い込みや不注意の積み重ねが、大きな事故を引き起こしてしまうのだと思います。

安全性を高めるために、自分でもできる備えはあります。ヘルメットの着用はもちろん自転車の整備をしておくことなどです。規則を守ることや、日常点検の習慣は、予測外で危険な状態になったとき、身を守ってくれるものだと思います。また、失敗しない、いつも完璧な人はいないからこそ、規則を守る意識が大切なのだと思います。

これからは、安全に生活するために、面倒だとは思わず、普段からルールやマナーを守っていききたいです。規則は覚えるだけでなく、きちんと守ることで自分を守ってくれることを学びました。そして、

これからのことを体験と共に、友人たちにも伝えて  
いきたいと考えています。

私にとっての一番は

丹原東中学校 一年 林 想乃

私はいつ、どんな時でも自分に何が起こるか分からないと思いながら生活している。毎日当たり前と言っている「行つてきます」の一言でさえ、明日も言えるか分からない。普段からの当たり前が一瞬で壊れてしまうかもしれない。そう思うようになったのは、とある経験からだ。

小学五年生だったある日、私は交通事故に遭った。当時の門限は十七時三十分。家から遠い公園で遊んでいて、ふと時計を見ると時間はもう十七時二十三分。「やばい、門限が…。」と思って急いで自転車に乗り、公園を出た。門限のことばかり考えていた私は、住宅街の細い道をほとんど周りも見ずに走行していた。その時だった。住宅街の駐車場から車が飛び出してきたのだ。ブレーキを思いっきりかけたけれど、もう遅かった。自転車の前輪が車と衝突していたのだ。幸い、私にも車の運転手にもけがは無かったが、車はへこみ自転車のハンドルや前輪は曲

がってしまった。車の運転手との話合いで、和解をすることはできたが、私は自転車に乗ることへの恐怖心が拭えず、中学校に入学するまで自転車に乗ることができなかった。

私はこの経験を通して、交通事故の怖さを知った。交通事故は自分とは無関係だと思っていたけれど、実際に自分の身に起こり得ることなのだと気付いた。さらに、私は、交通事故が起こったのは完全に運転手の方が悪いと思っていた。でも、本当にそうだろうか。自分が周りを見ていなかったことが原因なのではないかと今になって思う。自分の不注意で交通事故を引き起こしてしまったことで、相手や家族に迷惑をかけてしまった。交通事故は、自分自身の問題だけではないことにも気付いた。今でも、家族や友達が危険な運転をしていると同じことが起こるかもしれないと恐怖を感じることもある。

交通事故に二度と遭わないために、私は、常に安全運転を心掛けている。しかし、いくら私が気を付けていても、相手の不注意で交通事故に巻き込まれてしまうこともある。だから私は、家族や友達にも

常に安全運転を心掛けるように伝えている。私はたまたま軽傷で済んだが、次はそうではないかもしれない。学校の登下校や友達と遊ぶときなど、並列走行や片手運転などをせず、時間にゆとりを持ち、交通事故に遭わないように最善を尽くしていきたい。

「人の命は地球よりも重い。」これは、母親が日ごろ私に言っている言葉だ。命よりも大切なものは無い。明日も明後日もその先も、「行ってきます」「ただいま」が言えるように気を付けて生活をしていきたい。

信号無視は絶対ダメ！

小松中学校 一年 桑原 彩乃

小学生のときのお約束。「学校から家までの帰りは横断歩道を渡ること。」そして「横断歩道を渡るときは、左右をよく確認すること。」これまでに、学校でも家でも、あきるほど何回も言われてきた。

「左右をよく見て渡ってね。」

「右見て、左見て、もう一度右を見るのよ。」

と。でも、これは本当に大切なことだ。

ある日、私は横断歩道で信号待ちをしていた。やがて目の前の信号が青になる。さあ渡ろうと一歩踏み出す前に右を見た瞬間、猛スピードで目の前を車が走り抜けた。全身が縮み上がり、私は咄嗟に、

「うわあ！危なかった。」

と声を出した。左右を見ずに渡っていたら、きっとひかれていただろう。友達も、

「危なかったね。」

と言った。

車が交差点を通った時、信号は完全に赤だった。

にもかかわらず、反対の信号が、赤から青になるわずかな時間をねらって猛スピードで通過しようとしたのだ。ひかれていたら死んでいたかもしれない。

これほど悪質なドライバーでなくても、信号がもうすぐ赤になりそうなとき、スピードを上げて通り過ぎようとする車は多い。黄信号のうちに通ろうとスピードを上げているので、赤になっても止まれないのだ。

歩行者は、信号が青になっても、信号無視の車が走ってくるかもしれないとおいた方がよい。だから、私は左右を見て、両方の車がしっかり止まっているのを確認してから渡るように心掛け始めた。ただなんとなく、左右を見るのではなく、車が止まっているのをしっかり確認することで、交通事故を減らせると思う。

信号がある交差点の事故の原因の四割が、「信号無視」である。だから、歩行者と自転車利用者は、信号を守り、危険な横断は絶対にしないことが大切である。また、車のドライバーも信号を守り、黄色信号では原則止まるくらい、余裕を持った運転に心

掛けてほしい。そして、もしかしたら信号を見ずに渡る歩行者や自転車がいるかもしれないと考えて交差点を通過してほしい。そうすれば、信号交差点での重大事故は、かなり防げるのではないかと思う。

私は、中学生になって、自転車通学するようになった。毎日、地域の人が交差点に立って、小学生と中学生が安全に渡るようにしてくれている。小学生のときには当たり前のように思っていたが、ボランティアで命を守る活動をしてくださっている方々には、本当に頭が下がる。中学生になって、ボランティアの方がいない時間帯に自転車で登下校する機会も増えた。だから、自分自身で左右をしっかり確認することの大切さを、とても感じている。

令和六年の全国交通事故発生件数を調べてみた。歩行者の事故は約五千件起きていた。また、死者数は、約六十人であった。それに対して、自転車が関連した交通事故の発生件数は約三万件も起きていた。そして、死者数は前年度より減少はしているが、約三百人と歩行者の五倍もいた。

自転車というのは、免許が要らないけどかなり

危険な乗り物なのだ。そして、事故にあうと死んでしまう確率も高い乗り物である。私は改めて気を引き締めて運転することと交差点や見通しの悪い場所での左右確認を心に誓った。

交通事故は、いつどこで起こるかわからない。そして、誰もが、被害者にも加害者にもなりうる予測不可能な出来事である。特に交差点は事故が起こりやすい場所だ。そこでの信号無視は重大な事故につながる。私は今日も、信号を必ず守り、左右をしっかり確認して横断歩道や交差点を渡る。

笑顔を守るために

西条北中学校 二年 小池 真生

誰もがあと少しだけ自動車や自転車の安全運転を心掛けること、それだけでどれほどの命を救うことができるでしょうか。

先日、愛媛県は交通事故での死亡者数が今年に入り全国でワーストであるというニュースを見ました。そのとき、私は母が中学生の時に体験した話を思い出しました。「十四歳のまま、時が止まっている。」母の言葉に大きな衝撃を受けたことを……。

母の友人は自転車で行行中にトラックと衝突し、突然命を奪われたのです。ヘルメットをかぶっていても、亡くなってしまったそうです。その瞬間、当たり前にあるはずだった日常や未来は失われました。数日前の笑顔をもう見ることが叶わない現実を、母は中学生ながらにどう受け止めていいか分からなかったそうです。母は、「私たちは年を重ねて大人になることができる。でもその友人は私たちの中できっと十四歳のまま。」と言っていました。母は夏が

来るたびに事故の事を思い出し、心の中で手を合わせているそうです。母のように悲しい思いをしている人がまだまだたくさんいる。そんな人たちを一人でも減らすことができれば。そんな思いは深まるばかりです。

皆さんは、年齢層別の自転車乗用中死傷者数で人口十万人当たりの割合が最多になっているのはどの年齢層か知っていますか。六十五歳以上のシニア層の割合が高いと思う人も多いのではないのでしょうか。しかし、自転車の安全利用促進委員会のデータによると、十五歳から十九歳の私たちのような中高生の割合が他の年齢層に比べて著しく高いのです。では、なぜ中高生の割合が高くなっているのでしょうか。私は、中高生の自転車事故における法令違反の割合が高いからだと考えました。法令違反の割合は、全年齢では六十パーセントであるのに対して、中学生では七十パーセント、高校生では六十九パーセントと、全年齢の割合よりも中高生のほうが高くなっていることが明らかになっています。私たち中高生は、本格的な交通ルールを理解する機会が少なく、交通

事故の危険性に対する認識が低くなっています。自転車事故を減らすためには、一人一人が交通事故に対する意識を高める必要があります。そして、中高生は被害者になることもあります。加害者になることもあります。「中高生だから」といって油断することはあってはいけません。自転車は車両に分類されます。気軽に乗れるからこそ、より安全に気を付けて乗用し、交通違反をしないことが大切です。自分の命を守るためにも、他の人を傷つけないためにも、まずは自分から行動できるようにしたいです。

私はまだ、実際に交通事故に遭ったことはありません。しかし、母の話を聞き、中高生の自転車事故の現状を知ったことで、交通事故の危険性を理解することができました。事故が起こってから後悔しても、相手の時間も自分の時間も戻ってくることはありません。この作文を読んでくれたあなたが交通事故の危険性を周りに伝えてほしいです。あなたがあなたの言葉で伝えることで、守ることができる笑顔や、未来があるはずだから。